

## 2010年度基調を受けて

市内サークル 細田俊史

### ◆排除に対抗する学級集団づくり

基調では、「K」は、放っておけば真っ先に排除されてしまいかねない子どもと述べている。私がかつて、そして現在まで出会ってきた「K」はすでに孤立しており、はみだしていた。学級の子ども達から、学校の教師たちから、そして、地域の大人たちから異質な者として烙印を押されてしまっていた。出会う前から排除されかけていたのだ。いや、席は教室にはあり教室に来ているが、精神的にはすでに排除されてしまっているのかもしれない。

この「K」との個人指導が、一番エネルギーがいる。なにしろ指導・被指導の関係がなかなか結べないために、関わっては無視され、さらに関わっては悪態をつかれてしまう……。連日のトラブル発生に、多くの教師が疲れ果ててしまい、「いいかげんにしてくれよ・・・」という気持ちがわき起こってくるのも至極当たり前のことだ。私は、その感情のわきあがりを感じながら、「でも、この子は好きでこんなことをしてるわけじゃない。この子がこういう行動をとるのには訳があるのだから。こうするしかなかったのだから・・・」と、理性でその子と向き合いなおしている。感情に流されてしまえば、排除の側に身を落としてしまいかねないギリギリのところでは日々実践しているのだと思っている。

基調では、『「K」に対する個人指導は、「K」を護り、世話をし、対話することを通して、「K」の内面に「共感的他者」として取り込まれていくことを当面の実践課題とする。』と述べている。護るとは、防衛するということだ。何から防衛するのか？それは、周りの子どもたちや教師・大人からの非難や排除の視線・圧力から防衛することだと思う。

では、何をすることが「K」を護る（防衛する）ことになるのだろうか？これが実践的に難しいところである。かつて担任したS君との関わりを思い出しながら考えていきたい。

### ◆S君との日々

S君は、幼児期から荒れた行動をして周りの子どもにさんざん迷惑をかけてきていた。小学校に入ってからその行動は収まることはなく、授業中の立ち歩き・教師への反抗・暴言・教室や学校からのエスケープ・トイレへの立てこもり・同級生への暴力、と激化していた。

2年生になったS君は、私が担任して数日間だけはおとなしくしていたが、次第に本領を發揮しだした。朝の会の時から紙飛行機作りに夢中になっていて、なかなかやめない。近づいていって強めに言うとやめた。その後「紙をくれ！」と言うのであげようとする、戸棚を開けて勝手に取る。大きいから半分にしてあげようとするが「自分でやる。」と言って失敗する。紙が欲しい子どもを並ばせていると、途中で割り込んでくる。割り込んできたときにぶつかった子に先に紙を渡すと、S君は後回しにされたことに怒り、「もう戻らへんし！」と教室を出ていった。

その後、教務に連れられて教室に戻ってきたが、給食のときにまたトラブルが起きる。デザートゼリーの余りをもらうためのジャンケンして負けてしまったので、怒って教室を出ていき、廊下のロッカーなどをガンガン鳴らして中庭に降りて行った。追いかけて、「もどってきなさい。先生のゼリーをあげるから。」と言ってもすでに遅く、まったく聞く耳をもたない。体育館前を歩いているのを見かけて、大声で「S! 怒ってないから、戻ってきなさい。」とくり返すとS君は立ち止まった。体育館横の階段のところで、Sに接近し「先生のゼリーをあげるからな。」と言うと、落ち着いてきたので、手をつないでやって教室に戻った。ゼリーを渡すと「ありがとう!」と言って席に戻った。

同じ日の午後の授業中に立ち歩き始め、本を持って教室を出て行こうとする。私が「出たらあかん!」と何度も繰り返すと出口で立ち止まった。が、結局出ていった。

次の日、5時間目の授業中に教室の後ろでふらふらしているS君に他の子ども達も気を取られて、興味を持って眺めているようだったので「前を向きなさい。」と叱った。そして、こう言った。「S君が今、勉強しないでふらふらしてるのを、先生は認めないけど、今はゆるしてる。S君も本当はできるんやで。でも、急にはできないと思ってるから。」「でも、できる人は、ちゃんとやらなあかん。1年の時のままやったら、あかんねん。」と。2年生の子にどれだけわかったかどうか不明だが。そして、出て行こうとするS君に「S。出ていったらあかん。」「この学校に、あかん子はいないんや。Sもあかん子やない!」と呼びかけた。S君はちょっと立ち止まったが、廊下に出ていった・・・

翌日、めずらしく授業に参加したS君は、自分が手を挙げた時に当ててもらえなくて不機嫌になってしまう。「では、さようなら・・・」と本を持って廊下に向かうS君に、私は「S。出たらあかん。がんばれ!」と声をかけた。すると、期せずしてA君から、「S。がんばれー。」の聲がかかった。ドアを開けて廊下に出かかっていたS君が立ち止まった。他の子からも「S。がんばれー。」と次々と声がかかり、S君は廊下に出るのを思いとどまったのだった。

私は、S君の傍に行って「S君、よくがんばって出なかったな。」と褒め、「外へ出たらあかん。どこに行ったかわからなくて心配やから。本は教室で読みなさい。」と話し、A君たちには「ありがとう。A君がはじめに声をかけてくれたおかげでS君が外にでるのをやめたよ。声をかけてくれたみんなもありがとう。」と言った。

次の日からS君は軽く注意したくらいでは席になど戻らなかった。戻ったとしても学習にはなかなか参加しない。また、立ち歩きを始める。注意をすると「もう出ていくし!」「さようなら。」と教室を飛び出していく。

この時期、意識的に行ったのは、どんなに悪態をついて出て行って私が怒った後でも、戻ってきたら普通に変わりなくやさしく接してあげることだ。給食の時に出ていった時は、もどってきたら「怒ってないから、ちゃんと食べや。」とSが欲しがったおかずをあげたり、授業中に廊下に出ていったS君をつかまえて、おんぶしたり抱っこしたりして連れ戻した。

そんな時 S 君は屈託のない笑顔を見せるのだった。S 君が笑顔で戻ってくると、他の子ども達もにこにこ笑顔で迎えてくれた。これには本当に救われる思いだった。

放課後に S 君の家に家庭訪問して、母親から S 君の生い立ちを聞いた。S 君はいつも威圧的に接する父親に委縮して生活してきた。S 君が 2 歳の時に妹ができ母親に十分かまってもらえなくなるが、父親は母親の代わりに S 君をかまってくれるような人ではなかった。がまんして生きて来たのだと思うと母親は話してくださった。(その後母親は病気になり、父親は家を出ていくことになる。) S 君は幼稚園の頃、乱暴な子に負けたらあかんと思っ手や足を出すようになってきて、問題児のレッテルを貼られてきたとのことだった。

話を聞いた後、私は用意してきたワンピースのノート (S 君が大好き) を出して、私と母親と S 君の 3 人で二つの約束を書き、学校でがんばったことをノートに書くので母親が毎日見てくれるよう頼んだ。二つの約束とは「人にぼうりよくをしない」「教室から出ていかない」だ。このノートに S 君が学校で見せた肯定的な姿だけを書いて、母親とのやりとりが始まった。S 君が落ち着いてみんなと一緒に学習に参加するようになるのには、その後まだ何週間もの時間が必要だった。

今、再び S 君との日々を思い返し、私は S 君を護ってきたのだろうかと考えている。そして、S 君や周りの子に何をすることが、そして何を語ることが、S 君を護ることになるのだろうかと考えている。詳しくは後日レポートに書き起こして、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。

(基調提案全体についてではなく、個人指導のとっかかりのところまでしか書くことができませんでした。)